

# 明窓

図書館だより  
第 74 号  
発行 平成23年6月1日  
秋山市立中央図書館明德館  
秋田市千秋明德町4番4号  
電話 832-9220

## 吉村昭『三陸海岸大津波』

前秋田市立中央図書館明德館長

北条 常久

吉村昭には、秋田県八森町の岩館海岸で転覆したハタハタ船に取材した『ハタハタ』という短編がある。私は、その作品論を書くために、舞台となった岩館海岸を訪ねた。吉村は、新聞でハタハタ船の転覆事故を知り、岩館海岸を訪ね、漁村を歩き地理を知り、漁船にも乗り、ハタハタの生態を能代北高校の生物学教師相沢東一から学んで、ハタハタ船転覆による悲劇を小説とした。

私は、吉村が、実際に話を聞いた漁師や相沢東一に会い、彼の小説を再読したが、そこからは主人公の悲劇が感得されず、海に生きる人々のたくましさを感じられるだけであった。

しかし、今度の東日本大震災を機に再版された吉村昭の『三陸海岸大津波』（文春文庫）を読んで、その理由が理解できた。

同書は、第一章「明治二十九年の津波」、第二章「昭和八年の津波」、第三章「チリ地震津波」の三つの章からなる、薄手の文庫本である。吉村は、岩手県の三陸海岸の各地を歩き、文献にあたり、古老にインタビューをしている。吉村は、小説家であるが、『三陸海岸大津波』は、創作ではなく、あくまで文献と地元の人々の証言で埋められている。

ここに、「明治二十九年の津波」の一部を紹介する。

岩手県下の被害はさらに甚しく、死者は実に二二、五六五名、負傷者六、七七九名、流失家屋六、一五六戸にも及んだ。：岩手県下の漁船の九〇パーセントは津波によって流失し、漁具もほとんどが失われ、漁民は仕事を再開する手がかりも得られなかった。津波によって大打撃を受けた三陸沿岸一帯の村落の生存者は、再び津波が来襲せぬかとおびえづけていた。

そして、さらに昭和八年の大津波、三十五年のチリ津波と続く。三陸は津波に見込まれている。三陸はとても人の住むところではない。だって、三陸の津波は近代になってからばかりではない。記録にある主なものだけでも、貞観十一年（八六九）に死者千余名、慶長十六年（一六一一）に死者二千余名、元禄九年（一六九六）に船多数沈没し、死者数千人とある。

津波は、今後も三陸海岸を襲い、災害をあたえるに違いない。三陸の人々が、嫌気がさして、この地を離れて行かないのが不思議だ。海とは、人々に多くの恵みも与えるが、その生命をおびやかす苛酷なもので、容赦なく死をも強いる。

しかし、彼らは、やられても襲われても、その地を離れようとはしない。人が何人死んでも、船が何艘壊滅して

も、三陸の人々は、自分たちの生活を復興させて来た。彼らにとつて、三陸の海はいつたいたいなんなのだ。

吉村は、この地を二十年も歩き続け、「都会や工業地帯の海は、海の輝きもなく、汚水の流れこむ貯水場ではない。三陸沿岸の海は土地の人々のためにある」と言う。彼は、三陸の海に、海の輝きと人々の豊かな生活を期待する。

しかし、海は、人間を豊かにする反面、生命を奪う。ハタハタ船の転覆も三陸の大津波も乗り越えて行かなくてはならない、人間の宿命なのである。三陸沿岸の災害は必ず復興するに違いない。それは歴史が証明している。



明德館の状況：  
本が約300冊書架から落下し、翌日まで臨時休館となった。また、4月27日までは開館時間を午後5時まで短縮、燃料不足により暖房を制限した。